

特集によせて

「あまりにも急いで恩返しをしたがるのは、一種の恩知らずである」(ラ・ロシュフコー『箴言集』226)。しかし、偉大な文人が何と言おうと、退職記念のこの種の出版物は、めでたくご定年を迎え、研究者として教育者として、一つの区切りにいたった先生の学恩にたいして、感謝の意を表明する一つの機会である。むろん、この文人が言うように、その学恩への恩返しは、この小さな出版物で尽きるわけではない。それは恩返しの始まりにすぎない。

ご退職の記念号としては、ここに掲載した特集は些か異例である。記念号では一般にこのような特集を組むことはあまりないからである。しかし、あえて『政策科学』編集委員会にわがままを言い、この特集を組んでもらったのには理由がある。立命館大学大学院政策科学研究科ではリサーチプロジェクトという名称で、複数の教員と学生が、一種の研究會方式で共同研究を行ない、同時に大学院学生の研究指導を行なう独特の仕組みをもっている。教員も学生も、それぞれに異なった研究課題をもちながら、それゆえに適度な距離感をもちつつ、大きな共通テーマを共有することを通じて互いに研鑽しあうというのが、この仕組の理念である。山根教授には、「公共政策とコミュニケーション過程」のチームが生まれ、それが現在の「競争学の構築」へと改変されるプロセスで、ご参加いただいた。

前者のチーム名の中にある「コミュニケーション過程」は、政策研究における人文学と社会科学の融合の意図が込められていた。それが「競争学」という聞きなれない名称になったのは、同じような異分野融合型の研究を保持しながら、近現代の集会的現象の特徴の一つである「競争」の多面的展開を捉えようとの意図があったからである。山根教授には、ドイツ文学・近代日本文化論の研究者として、このチームの研究活動、研究指導をリードする役割を担っていただいた。そうした大学院のチームティーチングの成果は言うまでもなく、そこから巣立っていった学生たちであり、その成果であろう。多くの学生がこのチームから巣立っていった。残念ながら、すべての修了生が寄稿できたわけではないが、やはり山根教授のご退職に際して、その学恩への恩返し的一端でも示せればという想いには断じがたいものがあった。それが今回の特集企画をお願いした理由である。

最後になってしまったが、この企画をご承認いただき、最後までその実現にご尽力いただいた『政策科学』編集委員会にたいして、記して感謝の意を表したい。

2012年2月1日

リサーチプロジェクト「競争学の構築」一同